

## マルドロールの「第一の歌」

長戸路 信 行

### 1.

イジドール・デュカス (Isidore Ducasse, 1846. 4. 4—1870. 11. 24) は1859年、モンテヴィデオの父の家を離れ、勉学のためフランスに渡る。母はイジドールが2才のときすでに亡くなっていたが、13才半で父からも離れ、大西洋の長い航海ののち Tarbes の Lycée impérial の第6学年に入学したのである。当時、フランス南部地方から南アメリカに移住して成功したものの子弟が本国の学校に入ることが流行であり、Tarbes は父母の故郷に近く、親戚もあった。13才ならば当然第4学年（フランス流の数え方で）に入るべきだったが、海外移住者の子弟が学力の遅れをとりもどすために1乃至2年下の学年に編入されることは珍らしく<sup>1)</sup>なかった。リセでは数人の友人ができたが、その中に6才下の Georges Dazet がいた。この Dazet はやがて Poésies I の扉に印刷された献呈者名の第一にあげられる名であり、「マルドロールの歌 (Les Chants de Maldoror)」の成立そのものに深く関係することとなる。このリセに1863年8月まで在学したのち、同年10月に Pau のリセに転校し、ここに1865年8月まで在学する。転校の理由は分らないが、健康のためではなかったかという推測も成り立つ<sup>2)</sup>。このリセの classe de rhétorique で師 Hinstin を持つ。かれの名もまた Poésies I の献呈者名のなかに「わが懐しき修辞学教授、アンスタン先生に」と記されている。

1865年8月から1867年までの間のデュカスの生活については殆ど分って

いない。1867年にモンテヴィデオの父のもとに帰ったことは乗船名簿から知られる。この間にデュカスは、パリに出て作家として立つことを父に認めさせたと思われる。パリに出た理由は *École polytechnique* を受験するためだったろうとか、医学を修めるつもりだったのではないか、などと仮説をたてるものもあるが確証はない。父からの送金は、パリにおける父の代理人たる銀行家 *Darasse* 氏から受けとることになっていたが、*Darasse* あてのデュカスの手紙から察するに、作家として立つためにパリに来たこと、作品を出版することは、基本的には父子の間で了解はついていたと思われる。そうだとすれば、モンテヴィデオ滞在中に何らかの習作を父に示して自分の才能を納得させようとしたであろうことは充分考えられる。

1867年の秋か、またはそれよりもさらに押しつまったころ、パリは *Grands Boulevards* のあたりのアパルトマンに居を定める。このあたりは当時におけるパリのもっともシックな贅沢な地区で、金持が集れば著名な作家や芸術家やジャーナリストもしばしば姿を見せ、それらに寄生する派手で怪しげな男女もうろつくという街がつづいていた。父から送られてくる生活費は、まず不自由しないだけはあった。

1868年8月に「マルドロールの歌——第一の歌」の原稿をパリの出版社 *Balitout, Ouestroy et Cie* に渡した。同月中に印刷は出来上がったが（作著名は\*\*\*となっている）、一般に発売はされなかった（あるいは発売されてすぐに中止された）らしい。原因は作中に *Dazet* という実名を記したために、*Dazet* または *Dazet* 家から強く抗議されたためであろうと思われる。（この版を *P1868* と呼ぶ。）同じ年デュカスはこの小冊子にほんの僅か手を入れたものを、*Évariste Carrance* が企画したボルドーの詩文コンクールに応募作品として送った。コンクールの締切りは同年11月末日であった。コンクールとは言うものの、優秀作品に金、銀、銅のメダルが与えられる程度で、ともかく応募作品はすべて採用され、「*Parfums de l'âme*」と名付けられた詩文集に収められ出版される仕組になっている。

出版は1869年1月。応募者は作品の1行についていくらという値段で金を払いこまなければならない。いわば作家志望の若者に発表の機会を与える企画で、企業としても成立っていたと思われる。（この版をB1869と呼ぶ。作者名はやはり\*\*\*となっている。）P1868と較べてもっとも大きな異同は、Dazet が頭文字だけのDになっている点である。

「第二の歌」が1868年11月の終りまでには出来上っていたことは、デュカスの手紙からほぼ断定できる。「第二の歌」から「第六の歌」までは、現存の順序通りにつぎつぎと書かれていったと考えてよい。（一つの歌のなかの節の順序はともかくとして。）1869年の春には6つの歌すべてを書きあげて、当時の有名な出版社 Lacroix, Verboeckhoven et Cie に出版の話を持ちこむことに成功した。同年の夏には製版、印刷が完了した。

（この版をP1869と呼ぶ。この版ではじめて Comte de Lautréamont の署名を用いる。）しかしこの完成した「マルドロールの歌」（本文だけで332ページ）は、第二帝政末期の厳しい検閲制度におそれをなした出版社の意向から、デュカスの存命中にはついに一般には発売されなかった。出版に要した費用1200フランは「水の中に消えてしまった」<sup>3)</sup>わけである。P1869の「第一の歌」はP1868に較べて、多くの個所で訂正の筆を加えられている。そのなかでもっとも重大な訂正は Dazet (B1869ではD) の名が完全に消去され、それが醜悪な動物の名に置きかえられている点である。

簡略ながら以上の伝記をふまえて、「第一の歌」の各節を検討してみる。

## 2.

I-1.<sup>4)</sup> 「これ（「マルドロールの歌」）は自分自身の註釈を含んだ作品である。だからこの作品について語ることは非常に困難である。」と Roger Caillois<sup>5)</sup> は記している。「マルドロールの歌」の冒頭からこの註釈

は現われる。ここでは読者への警告となっているが、このような警告または呼びかけの形をとった自己註釈はこの作品中に頻繁に用いられる。「願わくは読者が大胆になり、しばらくの間自分の読むところと同じように冷酷になって、これらの毒にみちた暗いページの荒れ果てた沼地を横切り、人跡まれな陰しい道を迷うことなく見出して行かんことを。と言うのは、読むにあたって、厳密な論理と少なくとも疑惑に負けないだけの精神の緊張を持ち合わせなかったなら、この本の致命的な毒気が、水が砂糖にしみ込むように魂にしみ込む<sup>6)</sup>からだ。」この書き出しの数行については多くの研究者が言及したが、作品の冒頭でこれほどはっきりと自己の作品について註釈し、読者の心構えを要求していることはまことに注目に値する。この作品が作者の明瞭な意図（構想ではない）のもとに書き始められたものであることを、これははっきりと示している。ロートレアモンのmystificationに眩惑されて「マルドロールの歌」を auto-écriture（自動筆記）の例証とすることは、十分な留保条件を付したうえでなければならない。だからこの本は誰れが読んでもよいというものではないと作者は前もって断っているのである。このあとに続く「寒さを嫌う思慮深い鶴たち」の描写は、臆病な読者に、危いと思ったら引き返す例として挙げられている。この鶴の飛翔はダンテの「地獄篇」に類似の描写があり、また自然科学書からの借用が認められるという<sup>7)</sup>。このように単に「引き返せ」というだけのことに、本来は補説的な例として出されたにすぎない鶴の渡りの群を、わざとらしく持ってまわった表現で、神秘めかして記す、しかもその描写に作者はのめりこんでいる。そのため読者ははぐらかされたような、やや馬鹿にされたような印象を受ける。これもロートレアモンがしばしば用いる方法の一つである。

I—2. この節もまた読者への呼びかけで始まっている。「読者よ、恐らく君はおれに、この本の冒頭で憎悪を呪によって呼び出してもらいたい

のだな！」そして読者はその憎悪を、欲しいだけたっぷり吸いこめるだろうと保証する。ただし「おまえが前もって呪われた永遠の観念を三千回もせっせと吸い込んでいたらという条件つきだぞ！」永遠 (l'Éternel) が大文字で記されていることから分るように、これはロートレアモンが用いた神をあらわす多様な表現の一つである。この憎悪は言うまでもなく、宗教的拘束に対する反動としての神への憎悪を指す。

I-3. 「マルドロールは人生の最初の数年はまったく善良だった、そのころは幸福に暮していた。」マルドロールが昔は善良だったこと、しかしやがて自分が悪人に生れついていることに気づき、本性にさからった生活のために頭に血がのぼるようになった。そういう生活に耐えきれなくなって、ある時決然として悪の道に身を投じたら、何ともいい気持になった、という。これは簡略な図式でマルドロールの悪意の発生の原因とその効果を述べている。これは前節の、宗教的拘束から神への反逆にいたる道程と全く同じ内容を述べたものだが、ロートレアモン——というよりも、少年期から青年期にかけてのイジドール・デュカスそのものの心の歴史を図式的に語っている。図式的であるだけに、誰れもが経験する平凡な告白となっている。デュカスは学校時代、一風変った激しやすい面もあったが、「良い生徒」だったと言われている。この節の Maldoror の名は P 1868 にあらわれ、P 1869 にも消されずに残っている。

I-4. 心情の気高さを書くのではなく、「このおれは、残酷の喜びを描くことに自分の天才を奉仕させるんだ！」この宣言も実に明確にこの作品の性格を定義づけている。この昂然たる宣言のすぐあとで「天才が神の摂理の隠された決定の中で、残酷さと手をにぎっていることはありえないだろうか？あるいは、残酷なるがゆえに天才であるということはあるまいか？」と自問し、ついで読者に対し、「この問いについての証明は、お

れの言葉の中に見つかるだろう。おれに耳を貸す貸さぬはおまえたち次第だ。」と言う。このように二転三転する用意周到な自己釈明を行ったのちに、突然作者は、現にペンを持っている作者の立場をはなれて、次のような言い訳をする。「……失敬、頭の髪が逆立っていたようだな。だが、なんでもない、ほら、手でひと撫でしたら簡単にもとどうりになっただろう。歌を歌う男は、自分の歌が人に知られないようにとは言いはいしまい、反対に自分の主人公の高慢で邪悪な思想はあらゆる人間のものと自慢したいものなのだ。」このように筋の終末部で「……」を用いて、舞台の役者が突然観客席に降りたように、醒めた註釈を自作に加える方法も、ロートレアモンの多用するところである。書きながら自己の立場を意識し、それを註釈し、時に弁明し、最後につき放して、すべてを冗談か間違いかのように嘲笑してみせる。「マルドロールの歌」全篇を通じて、作者の熱狂、憤激の裏につねにこのような反転がある。それがまたこの作品の魅力の重要な要素となっている。また末尾の「自分の主人公」はP1868では「マルドロール」となっている。

I-5. 「生まれてこのかた、おれは見て来た、人間どもが一人残らず肩をすぼめて数々の愚かな振舞いをし、たがいに仲間を阿呆にして、手を変え品を変え魂を墮落させるのを。」マルドロールの（あるいはロートレアモンの、あるいはデュカスの）苦悩の原因の一つは醜怪下劣な人間どもにある。人なみに笑おうとして鏡にむかい、唇の合わさるあたりをナイフで切り裂くが、血がおびただしく流れて、笑顔はついに作れない。この部分の描写は「彼の名声にたいそう貢献した有名なページ<sup>8)</sup>」である。この節の人間罵倒は、自分以外のすべての人間にむけられていて、マルドロール自身の善良性を証明する役割を負っている。しかしこの人間罵倒、人間嫌悪はやがて自分自身の上にもむけられるはずである。（笑いの醜怪さに対する嫌悪の感情はIV-2にも現れる。）なおこの節は Poésies II において

全く裏がえしにされている。

I-6. この節は一転して、少年に対する残虐な犯罪を描いてみせる。2週間のあいだ爪をのばしておいて、「上唇のうえにまだなにも生えていない子どもを」さらって来て、はじめはやさしく愛撫するふりをして、突然子どもの柔い胸に爪を立てて引き裂く。むごたらしい情景を続けたあとで、こんどは雪崩のように隣室に駆け去り、そこからまた少年の倒れているところへ駆けこみ、少年を助け起し、「だれがこのような名づけようもない罪惡を君に加えることができたのか！」と叫ぶ。その時、後悔の念と、「遅すぎたという思い」に胸は高鳴る。ここには自虐の快感がみとめられる。それからまた一転して、少年に向い、「許してくれ、君の骨を砕き、君の肉体を（…………）引裂いた人間は、君の高貴で清らかな顔の前にいる男だ。」と告白する。そして少年に、こんどは君がぼくを引き裂いてくれと哀願して言う、「そして二人で苦しみを味わおうじゃないか、ぼくは君に引き裂かれる苦しみを、君はぼくを引き裂く苦しみを……唇と唇をぴったり合わせて。おお、ブロンドの髪といとも優しい目をした少年よ、（…………）」sadique な情景。ここには Sade の *l'Histoire de Juliette* (1797年) の影響が歴然としている。弱いもの、子供、青年、若い女を犠牲の対象にし、しかも残虐と *erotisme* とが密着している。また「爪」によって切り裂くことに注目する必要がある。爪は「マルドロールの歌」の中で残虐性を表現するための重要な要素となっている。少年の髪はブロンドとなっているが、「第二の歌」以後に登場する固有名詞を持った少年（ないし青年）Lohengrin, Lombano, Holzer, Mario, Falmer, Réginald, Elsseneur, Mervyn はすべて同じ一人の人物を現わしているようにみえる。善良な、ブロンドの、愛され、そして引き裂かれる少年。これはつまり G. Dazet を指すのであろうか。少年に対する犯罪なるものが、何らかの伝記的事実に基づくものなのか、それとも単なる幻覚にすぎぬものか、

判断すべき資料は存在しない。しかし少くとも心理的には罪を犯した——犯したと信じた——ことは確かである。I—10, IV—8等にも同種の告白があり、さらにIIからVまでの全構成が、少年に対して犯した罪の自責と、それからの解放への希求という一本の糸によって貫かれていることは<sup>9)</sup>M. Blanchotの指適したとうりである。この節はこれで終りとならず、作者はもうひとひねりして、これこそ「ひとりの人間を苦しめておいて、同時にその人間から愛される」「それこそ考えられる限りの最高の幸せ」であり、少年を病院まで運んでやれば「人はおまえを善い人だと言うだよ。」とつけ加えて、あくまでも *ironie* を重ねている。

I—7. 「おれはあちこちの家庭に騒動の種をまくために、淫売と結託した。」作者が *prostitution* を経験したか否かは分らない。しかしモンテヴィデオの父の家があった辺りには、その種の女が立つ街があったと言われている。<sup>10)</sup> またII—5にみられるように、ロートレアモンがパリで住んだ Grands Boulevards と Bourse の辺りにも *prostitution* は出没した。「家のように大きい一匹の螢」は神とその正義とを指す。このように突拍子もない *objet* を持ち出すのは、ロートレアモンのテクニクの一つである。その螢の光で読まされる墓碑銘には「ここに胸病みて死せる少年眠る。なに故かは、汝知らん。彼がために祈るなかれ。」と記されている。これもまた少年に対する犯罪を暗示する。*prostitution* は不幸な人間一般を指しているともとれる。「不幸な人々には同情するんだ。あんたの罪じゃないさ、永遠の正義というやつがあんたを創ったんだから。」また「今日から、おれは美德なんか捨てよう」という言葉から、神に反抗する権利としての悪徳そのものを示すものとして *prostitution* を持ち出しているとも解される。Edmond Jaloux は「ロマンティックであるが、発展的進行を持たず、神学的秩序もなく、個人的情熱もない『神曲』、だがもう一つの『神曲』のように恐怖と血と呪いの強迫観念が姿を見せている『神



曲』』であると言っている。「モンテヴィデオ生まれの男の(……)」の部分は、言うまでもなく伝記的事実である。

I-8. 「月の光」は「マルドロールの歌」の中での重要な明りである。一般に、月、夜、風等はロマンティック文学にしばしば登場する。月の光の下を不可解な本能的欲求にかられて馳けずりまわる犬というイメージは当時の *roman noir* が好んで描いた雰囲気と同種のものである。しかもこの犬は「無限への癒しがたい渴きに取りつかれている。」そして「おれもまた犬どものように、無限への欲求を感じるのだ……」しかし自分はこの欲求を満すことができず、孤独で、残忍で、「至高の存在が(……)おれに焼きつけた醜くさの印しを」かくして歩きまわる。そのあげく、太陽が他人に欲びをふりまきながら昇るときに、「おれの表情は闇を塗りこめた空間を凝視して微動だにせず、愛用の洞窟の奥深くうずくまり酒のようにおれを陶醉させる絶望に浸」る。ここには無限への渴望が反転して不毛の麻痺に陥る心理経過が的確に表現されている。「おれはわらの寝台の上に立ちあがり、目を閉じて、何時間もかかってゆっくり首をまわす、右から左へ、左から右へと。」この描写にはひどく写実的な感じがある。ロートレアモンの経験が含まれているように思われる。この節は「……いたい、だれがおれの頭を、鉄床を打つ槌のような鉄の棒でぶんなぐるんだ？」という言葉で結ばれているが、ロートレアモンが節の末尾に「……」で導かれる数行を置き、その節全体を註釈したり嘲笑したりする手法をしばしば用いることはすでに見た。デュカスは中学生だった頃から頭痛になやまされていたらしいが、ここにその伝記的事実がのぞいていると考えられる。そしてまた、この節全体を頭痛のせいにして読者をつき放す。

I-9. 「年老いた海原よ」の呼びかけを含む有名な節。ここでもはじめに読者への呼びかけ、忠告がなされている。「(……) 歌の一節を大声で

読み上げて、諸君に聞かせよう」とか、「諸君はこの朗読を聞きながら」とかいう言葉から、作者がこの節を朗読しつつ書いたとも考えられるが、P1868が書かれたころ（またはP1868に収める前の、それぞれ独立した原稿が書かれたころ）には、まだ大声で読みあげながら書く方法は完全には実行されていなかったかもしれない。P1868からP1869への異同は、朗読からもたらされたと思われる句読点の多用によるものだからである。「おれが海を見に引きかえして船橋を踏んでから、それほど経ってはいない、記憶は海と別れて来たのが昨夜のように生ま生ましい。」これを伝記的事実とみることにについては、多くの批評家が一致している。しかしそれがボルドーからモンテヴィデオへの航海を指すのか（そうだとすれば、この節はモンテヴィデオで書かれたことになる）、またはフランスに帰ってくる際の航海を指すのかは分らない。このあとに問題の「タコ *poulpe*」が登場する。P1869「おお、絹の眼差しをしたタコよ！その魂がぼくの魂と裂きがたく結びついたおまえ、地球上のもっとも美しい居住者であり、四百の吸盤でハレムを支配しているおまえ（……）なぜおまえは、おれのそばにいないのか、おまえの水銀の腹をぼくのアルミニウムの胸にもたせ、海辺の岩の上に二人して……」同じ個所がP1868では、「あゝ、Dazet！その魂がぼくの魂と裂きがたく結びついているおまえ、まだ少年ながら、女の生んだ息子たちのうち最も美しいおまえ、その名がバイロンの若き日の最も偉大な友に似ているおまえ（……）なぜおまえは、おれのそばにいないのか、胸と胸とを合わせ、海辺の岩の上に二人して……」となっている。B1869では Dazet がイニシアルだけのDになっている。バイロンの若き日の友というのは Dorset のことである。ロートレアモンの読んだと推定される著作のなかでバイロン（特に *Childe-Harold*）は重要なものの一つであって、多くの個所でその影響が指摘されている。海への呼びかけも *Childe-Harold* に見られる。また自分の作品の意図を作中で予告したり、読者への呼びかけを行うこともバイロンが用いている。ironique な

挿入を行って小説の筋を中断するという手法も19世紀には多かった。アルミニウムの近代的電解法の発明(1886年)される前、アルミニウムが貴金属なみの高価な元素であった当時、「アルミニウムの胸」という表現はシャレたものであったに違いない。

「年老いた海原よ」の呼びかけではじまる段落が10個(a~j)ならべられている。「年老いた海」という語そのものもシャトーブリアン、ユゴー等がすでに使用したものである。a)海は人類の荒々しい原始時代を思い起させる。b)海のまるい形から人間の小さい目を連想し、人間は自分で思っているほど美しくはないという。c)海の自己同一性に対し、人間の変幻きわまりなさを攻撃する。d)海は自己の秘密をたやすく見抜かせたりはしない、慎み深い、それに対し人間はとるに足りないことを鼻にかける。ここで「おまえはすでに鯨を人間に与えた」という言葉が出てきて読者を面喰わせるが、これは Michelet の著書の記事——鯨を捕るために人類は遠洋を航海する術を学びはじめたという——をふまえて<sup>12)</sup>いる。前後の説明を一切はぶいて、ただ海が「鯨を人間に与えた」と記すのは、作者の用いた意識的な mystification である。また Michelet を parodier する効果もねらっている。e)海が養っている種々の魚たちに比べ、人間は自分の穴にとじこもって、ますます自分を卑小にしている。f)海の大きさにひきくらべ、人間は腹をふくらませようとする蛙にすぎない。g)海水の苦さを批評家の苦さにくらべている。h)「海原の深さと人間の心と、どちらが知りやすいか」と問い、人間の心理の不可解さを述べる。前夜は熱烈に愛し合っていた二人の恋人が、一言の行き違いから憎悪と復讐を抱き合うようになる。ボードレールの詩「おまえたち二人はともに暗く黙している。人間よ、たれもおまえの深淵の底をさぐらず、海よ、たれもおまえの内奥の富を知らぬ。それほどおまえたちは自己の秘密を守って放さない。」(L'Homme et la Mer)との類似が指摘される。また「月がマストの間で不規則に揺れている時刻に」の部分は、シャトー

ブリアン「風は冷く、海は美しく、夜は静かだった。月はマストと帆綱の間で揺れているように見える」 (Itinéraire de Paris à Jérusalem) に酷似している。 i) 海はあまりにも強力である。人間どもはひとしきり数百匹の *léviathans* (巨艦) を放って砲撃の音を響かせるが、数刻の後にすべて海底にのみこまれてしまう。 j) 「偉大な独身者よ」と海に呼びかける。この語もシャトーブリアンがすでに用いたものである。ここでは a から i までの海への讃歌と人間の卑小さへの軽蔑がいま一度まとめて歌われている。この節には、その頃読んだ書物がデュカスに残していった漂流物とも言うべきものがあちらこちらにひっかかっている。しかしそれらすべてはロートレア蒙ンの *sarcastique* な色合いに染められている。それからまた、船のデッキの上で目の前に海を眺めながら手帳に記したのではなかろうかと思われる写実的な描写もみられる。この節がモンテヴィデオ滞在中に書きあげられ、父に示されたのではないかという推定もあなたがち根拠のないものではない。

I-10. おれの最後の時には、坊主どもに取り巻かれたくない、「おれは嵐の海で波に揺られて死ぬか、山の上に突っ立って死ぬかしたいんだ」そして「おまえらは束になっても、おれの生まれつきの残酷さになかなない」と宣言する。この節にもまた「少年は友人の一人に加える犯罪について瞑想している」という、執拗にくりかえされるテーマがのぞく。この節の終末部もまた「……」で始まっている。「……おお、コオモリか、ありがとう、おれを羽ばたきで目覚めさせてくれたのは、鼻の上に蹄鉄の形をしたとさかを乗せたおまえさんだな。そうか、本当は残念ながらちょっとした病気にかかっていただけなんだな。いやいやながらまた生き返ったらしい。おまえがおれの方にやってきたのは、おれの体内にある血を少し吸うためだというものがいる、その仮説が現実だって、かまわんじやないか。」この部分が P1868 では「……その青い翼でおれを覆ってくれるこの

慰めの天使を遠ざけてくれ。行ってくれ，Dazet，静かに息を引取りたいんだ……しかし残念ながらちょっとした病気にかかっていただけなんだな，いやいやながらまた生き返ったらしい。」となっている。両者とも「…」のあとで，夢から醒めたように現実の描写にかえり，この節全体をちょっとした病気からくる幻覚にすぎなかったと否定してみせる。Dazetはタコのつぎに「コオモリ rhinolophe」に変化している。「鼻の上に蹄鉄の形をしたとさかを乗せた」というのは現実ばなれした怪鳥のように思われがちだが，このコオモリは実際にこのような半円形の膜質の突出部を持っていて，一名 fer-à-cheval（蹄鉄）と呼ばれている。しかしその形状を，くわしく且つ拡大して描写すると，現実ばなれした異様な物体に見える。れこはロートレアモンの，人を面喰わす技法の一つである。

I-10. この節は明らかにゲーテの有名なバラード Le Roi des aulnes (Erlkönig) を下敷に使用している。少年殺害のテーマにひかれたからであろう。P1868とP1869の間には多くの異同がある。P1868では4人の登場人物（母，子，父，マルドロール）による劇の形をとっており，話者の名を明記してある。括弧でかこまれたト書がある。P1869では話者の名は削られ，ト書は消されるか，または地の文として残される。P1869の「おれは胸底をえぐるような苦しみの長い叫び声をはるか彼方に聞く」という語句がリフレインとして4回くりかえされるがP1868では最初の1回のみ（したがってリフレインではない）。その他，かなりの書き加えが数箇所ある。全体としてみると，P1869はP1868に比較して，よりいっそう謎めいており，戦慄を増している。つまりロートレアモンの特色を出していると言えよう。この節も9と同様に，比較的早期に成立したものではないだろうか。と言う理由は，①下敷がはっきりしている，②修正箇所が多く，その結果ロートレアモンらしい特色が出て，作品としての厚みを加えている。③他の節にくらべてまとまった一篇の作品を書こうという意図が

汲みとられ、筋も状景も明瞭に理解しうる。以上の点からである。

I—12. この節も P1868 ではマルドロールと墓掘りの二人物で演じられる劇の形式をとっている。すなわち（場面は冬、北のある地方で行われる）という簡単なト書があるのみで、すぐマルドロールのせりふ「ねえ、墓掘りさん」が始まっている。P1869の「泣くことを知らぬこの男は」から「つぎのような会話を聞くことができただろう」まではP1868にはない。特に冒頭から「綱が切れて狩猟家を海へ落とすように、何個所にも切り傷をつけておいただろう！」までは、それ以下の墓場の光景とは何の関連もない話なので読者は途方にくれる。しかしこの部分が *Le Magasin pittoresque* という雑誌の記事からの借用であることを発見したのは P. Capretz である。この記事には「綱の長さは 200 から 400 メートル」とあり（P1869では 300 メートル）、さらに「綱が鋭い岩角で切れることもありうる」と記されている。この記述から「もし綱を用意するのが彼の仕事だったら」「何個所にも切り傷をつけておいただろう！」という空想まではほんの一步である。そしてこのフェロエ群島の場面は、たんにマルドロールの悪意を示すために、いきなり墓地の場面の頭につけ加えられた。こんな突飛な追加が読者をとまどわせることは作者は計算済みである。なお「泣くことを知らぬこの男」というのはマルドロールを指すと思われる。作者がハムレットを念頭においてこの節を書いたことは確かであろう。なお墓掘りの言葉の中にある「寄宿舍の中学生は、幾世紀にも匹敵する数年のあいだ」から「(……) はるか遠くへ飛んで行く。」までの部分は、作者の Tarbes および Pau での寄宿舍生活の回想そのものである。

I—13. P1868では、この節の前半「人間よ、小川の水門にひっかかって流れないでいる、裏返しになった犬の死体に」以下の部分はマルドロールのせりふ、「マルドロールよ、よく聞け」以下の部分は Dazet のせり

ふになっている。節の冒頭の地の文はP1869で付け加えられたものである。「蛭の兄弟」というのはマルドロールを指す。P1868の Dazet はP1869では「ガマ crapaud」に置きかえられている。（一個所のみは「北海の海豹の四枚の鰭」となっている。）たとえばP1869の「なんだ！君か，ガマか！巨大なガマ！……不幸なガマよ！……許してくれ！許してくれ！」は、P1868では「なんだ！君か，Dazet か，？……許してくれ！……許してくれ！」となっている。またマルドロールのせりふと Dazet のせりふのあいだにある地の文，「ガマは尻を据えてすわった（実によく人間の尻に似ている！），そしてナメクジやゾウリムシやカタツムリが不倶戴天の敵を見て逃げる間に，つぎのような言葉でしゃべりはじめた。」はP1868にはもちろん存在しない。この節の末尾の部分も P 1869 では「いざさらばだ，二度と，おまえの行く道でガマに出合おうと望むな！おれはおまえに殺されたんだぞ。そのおれが，おまえのために許しを乞いに，永遠に向かって出発するんだ！」となっているが，P1868では「いざさらばだ，二度と，おまえの行く道で Dazet に出会おうと望むな。かれはおまえがかれを愛さなかったと知って死にかけている。もしマルドロールがおれのことを想っていないのなら，どうしておれは生きているもののうちに数えられようか？おまえは見るだろう，誰れひとり従うもののない葬列が街を通りすぎるのを。おまえは心でこう言ってくれ『それはかれだ！』と。おれはおまえに殺されたんだぞ。（以下同じ）」

I-14. 冒頭の「現象の外見を信用するのも時には論理的だとするならば」の部分はP1868にはない。この種の表現は「第二の歌」以後に多く用いられるものである。「彼はアメリカ洲の海岸の，ラプラタ川の河口に生まれ（……）」以下の記述は全く伝記に一致している。「マルドロールの歌」全篇のなかで，これほどはっきりと作者が自分の伝記を明らかにしているところは他にない。「かつて敵同志だった二国民が」というのは，ア

ルゼンチンの独裁者 Juan Manuel de Rosas とウルガイの大統領 Fructuoso Rivera との争いから生じた1843年から1851年にいたる戦争を指す。この節はいわば「第一の歌」の終りをつげる後書きとでも言うべきもので、その中で「おれとしては第二の歌を世に出すために、あまりおそくならない時期に再び仕事にとりかかるだろう。」と述べている個所は、「第二の歌」の成立時期に関して示唆を与えるものである。

### 3.

「第一の歌」は、まず作者による自分の作品の意図の説明、註釈、読者への呼びかけ、警告をもって始められていることはすでに述べた。その意味で I-1 から I-4 までは一連の内容を持つものである。この4節は「第一の歌」の序文でもあり、「マルドロールの歌」全篇の序文でもある。この4節を P1868 と P1869 とで比較してみると、異同はほとんどすべて句読点に関するものである。P1869 では句読点は異常に多くなっている。ロートレアモンはピアノの前に坐り、和音を鳴らしつつ、大きな声で朗読しながら「マルドロール」を書いていったという<sup>13)</sup>。句読点の多用は、このような方法から生じてきたものであろう。句読点以外の異同の少いことは、この4節が比較的あとに執筆されたもの——おそらく「第一の歌」を一冊にまとめるにあたって付け加えられたもの——であることを示しているように思われる。I-4 でマルドロールが「主人公」に置きかえられているのは同じ固有名詞の再出をさけるための修辞上の訂正と思われるが、それにしてもマルドロールの名の消去にはちがいない。

I-5 以下では句読点の増加以外に、本文の異同が多数みとめられるが、その中でももっとも重要な異同は Dazet の名が消去されて、醜惡な動物名に置きかえられていることである。I-9 でタコ、I-10 でコオモリ、I-12 でシラミ、I-13 で「北海の海豹の四枚の鰭」そしてガマ、I-14 で疥癬虫となっている。動物の醜怪さが、節の順序を追っていっそ



う強められてゆくと Caradec は言う。<sup>14)</sup>もしそうだとしたら、それは訂正の順序をも示すこととなり、最初のタコの持つ意味が重みを増す。このタコは、ヴィクトール・ユゴーの述べていることの裏返しで、ユゴーへの<sup>15)</sup>当てつけであると Roger Caillois は断定している。いずれにしても、ここに登場する動物は、ねばつくもの、吸いつくもの、血を吸いとるもので、「マルドロール」に出てくる粘液性の動物の系列に属する。

Tarbes のリセ在学中にデュカスがもっとも愛した少年 G. Dazet。「第一の歌」はその愛に触発されて書かれたと言ってよい。いわばデュカスの詩想のそもそもの源泉であった Dazet、それがP1869では単なるDとなり、P1869ではこのような醜惡な動物の名に変えられている。この激しい変化は、おそらくP1868が Dazet (とその家族) の目にふれた (デュカス自身が献呈した可能性) 結果、Dazet (およびその家族) の憤激を買ったために、P1868はついに発売されなかったのではないかという推測を許す。作中において Dazet そのものは最大級の愛の讃辞を献げられてはいるが、その愛そのものもデュカスのひとりよがりであったかかもしれず、Dazet としてはこのように異常な残虐性を表現した作品に実名で登場させられることは甚だ迷惑であったろう。単なる少年同志の愛情以外の何らかの関係があったとしたら (その可能性はむしろ少いが) なおさらのことであろう。この突飛な置きかえは読者をいわば迷路にみちびき、この作品を難解なものにする一因となっている。置きかえによって前後の意味の脈絡が断ち切られてしまっている場合もある。しかし作者はそのような「晦渋」の効果も計算に入れていたのではあるまいか。と言う理由は、マルドロールの名もまた多くの個所で消し去られているからである。I-11, 12, 13, では、話者としてのマルドロールの名をすべて削ってしまっている。また I-12の「泣くことを知らぬ男」、I-13の「蛭の兄弟」はともにマルドロールを指していることは明らかだが、これらはP1869で加筆した部分であるために、はじめからマルドロールの名をさけたものである

う。このようなマルドロールの消去も、Dazet の場合と同じ効果をあげていることを考えると、醜悪な動物名が「愛の恨み」から出たものであるとしても、そのような置きかえによって作品にある新しい効果、作者の意図に沿った効果が発生したことを、ロートレアモンはあらためて認めたのであろう。

「少年が友人の一人に加える犯罪」については、「第一の歌」の諸所に現われるが、特に I-13の末尾の部分を P1868で見れば、「友人の一人」が Dazet であること、その犯罪なるものが何らかの愛に裏打ちされたものであることが察せられる。デュカスに、少年時代に起りがちな *homosexualité* の傾向がみとめられるとしても、現実に犯罪的事実があったか否かは、むしろ否定的に考えた方がよい。しかし愛と犯罪の意識がなかったら、「第一の歌」はもちろん、「第二の歌」以下は全く存在しえなかったであろう。

「第二の歌」にはパリがはっきりと出現する。「マルドロールの第二の歌は、イジドール・デュカスとパリとの出会いを背景として、詩人ロートレアモン<sup>16)</sup>の生誕を画」していると言っているが、「第一の歌」にはパリは全く登場しない。これに対し、モンテヴィデオ (I-8, 14), 海と航海 (I-9), 学校の寄宿生活 (I-12) 等がみとめられる。P1868が出版社にわたされたのは1868年夏であるから、この時まですでに半年以上もデュカスはパリで生活していたはずである。同年11月の終りには、パリ生活<sup>17)</sup>の色濃く出ている「第二の歌」を出版するつもりだったことを考えると、「第一の歌」の大部分がパリ来住まえに書かれていた（草稿としても）のではないかということを推測させる。他の作家の作品を下敷に使用した節 (I-11, 12) があること、短いながら完結した作品を作ろうとした意図のみえること (I-9, 11) は、これらの節がかなり早い時期にばらばらに作成されたものであることを思わせる。しかしパリに来てから書かれたものもあったであろう。I-1, 2, 3, 4の4節と最後の I-14

は、「第一の歌」を小冊子にまとめようと思った時に書き加えられたものであろう。このゆえに、この最初の4節と最後の一節には、これから書か  
るべき作品の方向が示されている。と言っても、「マドルロールの歌」全  
篇の構成がすでに確立していたという意味ではない。ただ、どちらの方向  
へむかうべきかという予感——というよりも天才的直観を、「第一の  
歌」の成立直前に得たという意味である。〔未完〕

- 注 1) F. Caradec: Isidore Ducasse, Comte de Lautréamont, La Table Ronde, 1970, P. 41.
- 2) 同書, P. 70.
- 3) 1870年3月12日付, Darasse あて書簡.
- 4) Œuvres complètes de Lautréamont, «Bibliothèque de La Pléiade», Gallimard, 1970. による詩節の分類法による。なおP1868等の名称も同書による。
- 5) R. Caillois: Œuvres complètes de Lautréamont, José Corti, 1947. への序文.
- 6) 渡辺広士訳「ロートレアモン全集」, 思潮社, 1969. 本稿の引用文はすべてこれによっている。
- 7) Marguerite Bonnet: Lautréamont et Michelet, R.H.L.F., 1964.
- 8) R. Caillois: 前掲の序文.
- 9) M. Blanchot: Lautréamont et Sade, Éd. de Minuit, 1949.
- 10) F. Caradec: 前掲書, P. 106.
- 11) E. Jaloux: Œuvres complètes de Lautréamont, José Corti, 1938. への序文. 渡辺広士訳.
- 12) M. Bonnet: 前掲書.
- 13) L. Genonceaux: Les Chants de Maldoror, Éd. Genonceaux, 1890. への序文.
- 14) F. Caradec: 前掲書, P. 93.
- 15) R. Caillois: La Pieuvre, La Table Ronde, 1973. 塚崎幹夫訳「蛸」中央公論社.
- 16) 杉村昌昭: マルドロールの第2の歌とパリ, フランス語フランス文学研究 N°21, 1972.
- 17) 1868年11月9日付書簡.